



らと、こうした仕組みを利用してくれる人もいます。経営する側からしても、労働力の確保という視点では助かりますね。

市長 なるほど。長井さんのような取り組みをする経営者は、周囲にはあまりいないでしょう。

長井 同世代の経営者仲間では、自分で子育てに参加したいという、私と同じ考えの人は多いです。

市長 それはうれしいことですね。ここ20年くらいでしょうか、ずいぶん職場自体の雰囲気も変わってきていると感じます。例えば、子どもの運動会などで休むというのも当たり前になってきていますよね。長井さんは、高崎まつりなどの地域活動も



若林 一恵さん

1歳の双子のママ。4年前前に転入。子育てなんでもセンターの託児を利用し、ご主人の協力も得ながら共働きを続けている。高砂町在住



長井 宏幸さん

8・7・5歳の2男1女のパパ。家業を継ぐため地元に戻り、切削加工業の会社を経営。子育てや地域活動にも積極的に取り組む。上大島町在住



小澤 沙弥香さん

2歳児と8か月児のママ。6年前に転入。東京の銀行に勤務し、新幹線通勤をしている。現在は育休中。八島町在住



富岡 賢治市長

子育て世代のニーズに耳を傾け、高崎独自の子育て施策に取り組み、若い人も安心して暮らせるまちをつくりたいと考えている

高崎の子育て事情。

がんばるパパ・ママを応援します

全国でも約半数の夫婦が共働きという現在、本市でも仕事を持ちながら育児に奮闘しているパパやママは少なくありません。市は、子育て世代が安心して暮らせるまちづくりを進めるため、さまざまな取り組みを行っています。今回は若い子育て世代のパパとママをお迎えし、高崎での子育てについてそれぞれの「生」の声を伺います。



余裕を持てる子育てのために 高崎独自の取り組み

市長 私が長い間公務員として働いていたときに、仕事に奮闘する女性たちが、保育所の送り迎えのことなどで、苦勞している姿をよく目にしたんです。私も身もオムツ替えとか、遊び場探しとか、子どものことで汗をかいてきましたが、そのことだけになってしまふと趣味もできない、地域活動もできない、どうしても生活がギスギスして視野が狭くなってしまう。もう少し親御さんが余裕を持てるような社会にならないかと前から思っていたんです。私は市長になって9年になりましたが、高崎の子育て事情をうんと良くしようと、高崎独自の子育て施策に取り組んできました。保育士の確保や子どもの人口が多い地域の保育所の整備、また保育所の入所受け付けを周年化して2週間で回答するようにしたり、子育ての事なら何でも受け付ける、託児施設も備えた「子育てなんでもセンター」をつくったり。昔はおじいちゃん、おばあちゃんや近所の人に助けてもらうのが当たり前でしたが、現在ではそうもいかないのが、困ったときに電話一本で駆け付けて、家事を手助けしてくれる「子育てSOSサービス」も今年から始めたんです。まず小澤さんは、お子さんをどこかに預けて、東京に新幹線通勤していらっしゃるんですか。

小澤 はい。2歳の息子を保育園に預けて通勤しています。今は来年の4月まで、2人目の育児休暇を取らせていただけて

ます。

市長 これまで小澤さんのようなケースだと、母親が家にいるということの上の子は保育園に入れられなかった。でも出産後の母親は大変なわけです。高崎では育児休暇中でも園に入れるようになりました。全国的にも珍しい取り組みです。

小澤 すごく助かっていますよ。「お兄ちゃん退園させなくていいの！」って会社の人にもびびりられました。

市長 そういう面では社会全体がまだ古い発想で、きめ細やかな配慮はまだまだなんです。新幹線通勤だと保育園のお迎えの時間には間に合いませんか。

小澤 はい。時短勤務で夕方6時には高崎に帰って来られます。会社でも会議の時間を早めるなどして協力していただけで、女性の働きやすさを求めていただけているので、ありがたいですね。

市長 企業も努力してくれていますね。

男性も育児に参加 変わりつつある世の中

市長 長井さんは経営者として、企業の努力についてはどうお考えですか。

長井 自身が育児に参加したいものから、育児休暇などには積極的です。うちの会社でも現在、2人の男性社員が育児を取っていますよ。

市長 反応はいかがですか。

長井 喜んでくれてます。他にも働き方改革といいますが、例えば2時間早く出社して早上がりをするとか、その逆も認めていますね。子どもの面倒を見たいか

積極的に参加されているんですね。

長井 はい。高崎には、お手伝いに出て行けるような環境がありますから。

市長 若い世代の人たちが、そうした活動に参加できるようにするためには、やはり子育てのサポート面は大切です。

ちょっと離れる時間をつくって ゆとりある気持ちに

市長 若林さんは、東京から高崎に転入してきて、大学にお勤めなんですね。お仕事の時は、お子さんをどちらかに預けているんですか。

若林 はい。子育てなんでもセンターにある託児ルーム「かしの木」を利用しています。本当に良くしていただいております。

市長 そうですか。朝7時30分から夜の10時まで預かってくれますからね。

若林 1か月前から予約できるので、預けるたびに次をお願いしていますよ。

市長 子どもは突然熱を出したり、具合が悪くなったりしますからね。その他、病院と連携して病児の預かり保育を受け入れてくれる施設を、私が市長になって、2か所から5か所に増やしたんです。

小澤 私も病児保育を何度も利用しているんですが、どうしても仕事を休めないときなどはすごく助かっています。もっと増やしていただけたらありがたいです。

市長 うれしいですね。病院との連携で難しい面もありますが、整備を進めていきたいと思えますよ。それと、なんでもセンターの託児についても大変利用が増え

ているので、拡充できたらと考えています。本来、育児そのものは、その人の人生にとってプラスになることです。でも四六時中育児ばかりになってしまうと、世の中の動きにもついていけなくなってしまう。親にとっても子にとっても、ちょっと離れる時間というの大切なんです。買い物でも映画でも、預ける側の理由は問わない、なんでもセンターの託児などを利用して、子育て世代が気持ちに余裕を持てるようになることは、広い意味では少子化対策にもつながっていくと思えますよ。

さらに先を行く 子育て環境を目指して

市長 子育て環境をもっと良くするためには、何かご意見はありませんか。

小澤 市内では、夕ご飯も食べさせて、午後9時まで預かってくれる保育園を利用しているママ友がいます。普段は早上がり仕事で切り上げなくてはなりませんが、週1回でも夜まで子どもを預かってもらえたら、仕事量をこなせて働くママとしてはありがたいと思うのですが。

市長 なるほど。面白いアイデアですね。個々の園では難しいかもしれませんが、子育てなんでもセンターなら実現できるかと思えますよ。

若林 以前、私が高熱を出してしまい体が動かず、2人の子どもの面倒を見るのが辛かったので、離乳食のお世話をしてほしいと子育てSOSに連絡したんです。そしたら直接子どもに関わることはできないと言われてしまったことがあって…。

市長 それは配慮が足りませんでしたね。まだ始めて間もない制度なので、そうしたご意見を伺いながら改善していきたいと思えますよ。

若林 ありがとうございます。

長井 あと、これから外国人労働者が増えていきますよね。そうした人たちが、子どもを育てられる環境も大事なことでと思うんです。私の息子が通っていた保育園にも、親子で全く日本語が話せない外国人の人がいました。小学校のALTのような人がいたらいいですね。

市長 なるほど。例えばスペイン語ができる人など、園に雇用して研究していきたいと思えますよ。気づかない視点で刺激になりました。やれることは何でもやっとうと思えます。今後ともよろしく願います。

同 ありがとうございます。



誰にでも気軽に利用してもらえる託児ルーム「かしの木」